



撮影=タイナカジュンペイ

明治神宮武道場「至誠館」館長

荒谷 卓さん

あらや たかし

1959年（昭和34年）、秋田県生まれ。東京理科大学を卒業した昭和57年、陸上自衛隊に入隊。調査学校、第一空挺団等を経て、ドイツ連邦軍指揮大学、米国特殊作戦学校に留学。陸自初の対テロ専門部隊「特殊作戦群」の創設に携わり、平成16年部隊発足とともに初代群長。20年退官。一等陸佐。21年より現職。鹿島神流、合気道6段、銃剣道3段、空手道・柔道初段。著書に『戦う者たちへ』（並木書房）がある。

武士道精神で 穢れた社会を 浄化せん

今ほど武士道精神が求められる時代はない。陸上自衛隊初の対テロ特殊部隊の創設者にして、剣術、合気道師範である荒谷卓氏。闘いの場所を道場に移した今、その信念はどこへ向かうのか。話を聞いた。



サムライの 強さの秘密

—— 武道研修の稽古は男性ばかりと思いきや、女性や外国人の方も多いですね。皆さん武道に何を求めて来るのでしようか。

荒谷 理由はさまざまでしょうが、例えば外国人なら単に打つ、投げるといった武道の技術面だけを学びに来る人はまずいません。彼らは技のみならず、武道の精神面に強い関心を抱きます。心技一体といわれるとおり、技術と精神の両面をうまく調和させるところに、武道の真価があります。こうした点に外国人、特に欧米人は関心を持つようですね。

—— 武道は単なる格闘技ではないと。

荒谷 ええ。技の体系だけなら武術になります。その技を磨く過程を通じて心

も磨き、人格の完成をめざす。だから術ではなく道、武道なのです。そのため海外の格闘技なら必ずある教習マニュアルが、武道ではさして重要視されません。

これには日本と海外との文化や思想の違いも大きいでしょう。西欧キリスト教社会では、人間は皆生まれながらに、アダムとイヴが犯した神への原罪を負っていると考えます。あるがままの自然状態は悪であり、人為的努力で理性を獲得し、秩序化することこそ善と考える。ですから彼らは武術を学ぶにしても、自分なしい知識や技術をいかに外部から付け加えるかを重視し、マニュアルに頼ります。

一方、神道に根ざす日本の見方では、人間は皆生まれながらに「直き正しき真心」を持っていると考えます。生きる中で纏う邪気や

この人に聞く

荒谷館長指導の武道研修科・一般クラスでは、平日夜にも
かかわらず30人余りの門人が汗を流す。女性の有段者も
少なくない



罪穢れを祓い落とし、真心
を取り戻すことに価値を見
いだす。そこでは知識の吸
収より、人間本来の感性を
研ぎ澄ませ、周囲の環境か
らいかに情報を感じるかを
重視します。この感性はマ
ニユアルでは磨けません。

——道場ではそうした感
覚をどう教えるのですか。

荒谷 実際に動いて己の
肉体で得た感覚から、なぜ
かという理を考える、とい
う手法を重視しています。
特に外国人にはそのプロセ
スが欠かせません。腕力で
勝る自分が、非力な相手に
いとも簡単に投げられ、組
み伏せられる。その実体験
が彼らに武道への敬意と探
究心を湧き起こさせます。

私が主に指導する合気道
でも剣術でも、およそ武道
は内的な中心力を強さの源
泉と考えます。人間の身体
で最も強いのは腰回りです

が、その核となる膺下の「丹
田」に精神と呼吸、体の動
きを集中させる。それによ
り手足の無駄な力みが取れ、
心技体を調和した圧力のあ
る技が決まるのです。

もちろん必死の相手を前
にして、丹田を鎮めた技を
出せるようになるには相当
の鍛錬が必要です。よく苦
境に動じない人を「肚の据
わった人」と言いますが、
丹田を鎮めると清々しい心
地となり、感性が研ぎ澄ま
されます。以前、出稽古に
きた欧米の武道家が「サム
ライの強さはここにあった
のか」と感想を話していま
した。武道の鍛錬は丹田を
鍛えること、それがつまり
人格向上の道であるのです。

君は軍人の顔を してる

——荒谷館長はいつごろ

から武道を始めたのですか。

荒谷 大学三年生の時に

この至誠館の存在を知り、探していた答えを見つけた

思いで即入門しました。高

校までを過ごした秋田では

陸上などのスポーツに打ち

込んでいたのですが、ある

時ふと「スポーツって何の

ためにやるんだらう」と考

え始めたら、目的喪失にな

ってしまいました(笑)。

何か社会に役立つ人間に

なりたいという思いは人

倍強く、東京理科大学では

土木科を選びました。何か

スポーツ以外をと空手を始

めますが、技術中心の練習

が物足りずに退部。情熱と

体力のやり場を求め、悶々

としていた時に、ある人か

ら至誠館を紹介されたので

す。以来、千葉から片道二

時間かけて通い、剣術や合

気道の稽古、神道、武士道

を学ぶ武学に没頭しまし

た。卒業後は自衛隊に入り

ましたが、これも至誠館の

師範のひと声がかきかけで

した。

——どんなひと声を？

荒谷 「君は軍人の顔をし

ているから自衛隊に行け」

と言われ「はい、わかりま

した」と(笑)。もつとも当

時の私は自衛隊をよく知り

ませんでした。昭和五十七

年ごろは、自衛官の子供と

いうだけで教室の机が廊下

に出されるほど自衛隊アレ

ルギーが根強く、メディア

でも存在が黙殺されていた

のです。私自身は祖国防衛

の軍隊なのだからと、有事

には命も捨てる覚悟で入隊

したものの、隊内ではそう

した気概が感じにくく、自

分が自衛隊を変えてやるこ

と意気込みました。

——武道に基づく精神教

育もなかったのですか。

荒谷 残念ながら全く。

基本的に近代軍の部隊行動

は一条乱れぬ集団性、統一

性こそ重要であり、個々人

の感性や意志による自主行

動は厳しく制限されます。

武士道が生かされる余地は

ないと感じました。

ところが、八〇年代に東

西冷戦が終わり、世界が対

立から新たな秩序づくりへ

と移ると、国対国から国対

テロ組織の戦いへと各国の

防衛体制が変わり、自衛隊

の部隊運用も転換期を迎え

ます。それまでの大部隊に

よる量的、破壊的な戦闘か

ら小部隊による質的、創造

的な対応へ。平成九年から

陸上自衛隊初の特種部隊の

創設が本格検討され、具体

化の段階で、私が責任者に

選ばれました。特殊部隊は

敵の殺傷、制圧だけが目的

ではなく、時に相手の敵対

心を懐柔し、破壊活動を挫

折させる政治的任務を担い

ます。日本の武道精神を備

えた兵士を養成すれば、世

界最強の特種部隊ができる。

そう思い、創設に全力を注

ぎました。

日本の知恵で 世界を祓う

——そうして実際に部隊

の創設を実現されて。

荒谷 はい。最精鋭のレ

ンジャー隊員からさらに選

抜し、私を群長に三百人編

成で平成十六年三月に発足

しました。さすがに皆気力

体力とも優等で、ある隊員

は志願してイラク派遣に赴

いた後、末期の肺がんが判

明しますが「死ぬまで隊の

ためにベストを尽くしたい」

と最期まで己の本分を尽く

し、凜として逝きました。

真の戦闘者たちと心結び、

己の信ずる正義のために生

を貫けた三年間は、実に充



実した時間でした。

その後、防衛省での要職の話もいただきましたが、恩師である稲葉稔・至誠館二代館長から「後任を頼む」とお声かけがあり、四十九歳で自衛隊を退官しました。武士道を受け継ぐ武人の育成に第二の人生をかける決意をしたのです。

——いわば日本人本来の武士道精神を、現代に再発見する指南役ですね。

荒谷 私は今ほど武士道が社会に必要とされる時代はないと考えています。占領憲法の精神教育によって、日本人の真心は穢れ、今やわが身の利益を最優先する輩が世を立ち回り、社会は

邪気に覆われています。これを清浄化するには、己の良心に従い、身を賭して行動できる武士道精神をもつた人の存在が不可欠です。武道の究極の姿は「相手を包容し、同化する」ことにあります。相手の邪気を清め祓い、正気を取り戻した相手を仲間とみなし、共

存共栄を図る。腕力で上から押さえようとするやり方は、いたずらに敵を増やすだけです。今後、人類が自然と共に生き、人々が協和して生きる社会を創造するために。日本民族の知恵を世界に生かしていくための戦いが今の私の背負うべき使命です。

(本誌)